

やくしまに 暮らして

ネイチャーガイド

大野 睦

第十八章 世界遺産と観光

■観光振興



これまでも述べてきたことだが、屋久島の経済の発展において観光産業の発展は世界自然遺産登録以降、右肩上がりに伸びてきていた。今も、ではない。この数年くらいをしてみると横波といったところであり、20年かけて増えた観光客数はようやく落ち着いてきたようにも見える。それは、屋久島にとって観光産業を考えたとき、そろそろちょうど良いくらいの数字で落ち着くところに来たのではと私は考えている。屋久島は国の国有林伐採事業が終わり、こ

れからの島の経済を考えたときに世界自然遺産登録があり、それを機に観光産業の発展を目指してきたのである。もちろん、それは全てが順風満帆であった訳ではない。世界遺産になれば観光客数が増える訳でもなく、その地域を保全するための方針や努力がなくてはならない。自然保護の観点からすれば観光客が増えることは望ましくないという意見も当然あつての今の屋久島がある。

■世界遺産登録は何のため

ここ近年の世界遺産登録に関するニュースや報道を見ていると、まるでオリンピックの誘致のようにも見える。まさにオリンピックと同じなら、各地から多くの人を訪れるようになるための準備は出来ているのだろうか。もちろん、世界遺産に登録されたからと言って観光客が増える訳ではないと考えている考える人も多いでしょう。でも、望むか望まないかは別として、世界遺産に登録されれば、当然その地を訪れる人は増える。その時に人が来ても、その地の人も訪れる人もどちらも困らないことが大

前提である。そもそも世界遺産とは何なのか。「顕著な普遍的価値をもつもの」を後世に遺すためのもの。そこに観光産業との関係は密接になってきたのも近年のことなのでしょう。1973年に成立した世界遺産条約は、前年にアメリカで国立公園制度が生まれて100年にあたる頃に始まっている。それから40数年の歳月で世界遺産登録地は今年1000件を超えた。それまでの歳月と、それからの歳月のスピード感があまりにも違うのは、まさに時代背景そのものを象徴しているように見える。



■世界遺産という冠



世界遺産登録が地域の魅力再発見＝観光産業の発展との期待を大きく掲げ、世界遺産登録を目指す自治体の動きをよく目にするようになってきた。そして、その反面住民は世界遺産になることが良いことなのか悪いことなのか、どうなのかわからないといった意見を持つ人が多いようにも感じる。海外ではどのように捉えられているのかわからないが、日本では世界遺産登録が観光客の増加に繋がるから、世界遺産登録を目指そうという狙いが大きくなってきている。そもそも、世界遺産に登録されれば観光客が増えるという方程式がどこにあるのか。

現在日本にある全ての世界遺産登録地の登録前とその後の観光客数の推移を見れば一目瞭然である。そして、世界遺産登録地でなくても素晴らしい観光地もたくさんある。そんな場所には、観光客を引き寄せる揺るがない魅力がある。世界遺産という冠だけで観光客が増える訳ではない。また観光客が増えるだろうとか増えたからと言って大きな施設を作ったり、大きなホテルチェーンの導入やコンビニやファーストフードが入ってくることを喜んで誘致しても、それがその地域の経済の発展に繋がるとは限らない。

かつて屋久島の観光客がまだ右肩上がりを続けていた頃、島に大きなホテルが2つ建設されるという話があがっていた。でもいつの間にかその話はなくなっていた。しばらくしてふと思い出して、ある人に尋ねてみたら、「そんなの出来たら屋久島どうなっていると思う？ずっと続けてきた民宿も、今あるホテルも潰れるよね？」屋久島はこの世界遺産の冠にあぐらをかいてきた訳ではない。「顕著な普遍的価値あるもの」が失

われないように努力を続けている。

大野 睦 BLOG やくしまに暮らして

<http://mutsumi-ohno.seesaa.net/>

